

# 学園 ミュージアム レター

学習院大学史料館

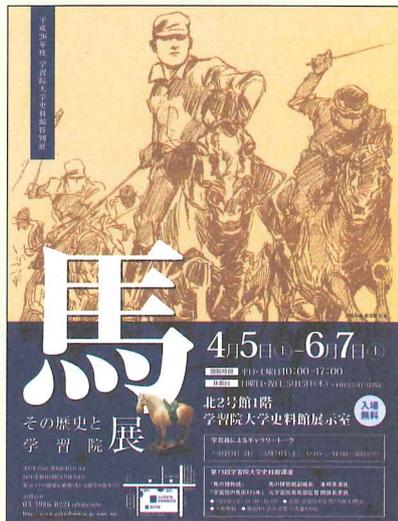
Gakushuin University  
Museum of History

# Museum Letter No.25

発行日 ● 平成26年(2014)4月5日

もくじ

ごあいさつ	1
I アジアを駆ける馬	2~3
II 中・近世史料にみる馬	4~5
III 馬と学習院とのかかわり 1	6~7
骨から見た乃木号・学習院の打毬	8~9
III 馬と学習院とのかかわり 2	10~11
特別陳列一左三ッ巴紋花鳥円文蒔絵鞍・鎧	12



## ごあいさつ

私は、4年間半館長を務められた文学部高橋裕子先生の後任として、本年度より館長を務めさせていただく経済学部のと光純と申します。よろしくお願い申し上げます。

さて、馬にまつわる今回の展覧会とその特集である本ミュージアムレターは、学習院における春の季節観とも実に良く合う企画です。OBの皆様は既に察せられたかも知れませんが、オール学習院の集いにおいて本学馬術部が行う子供たちのための乗馬体験の催しは、学習院の4月を象徴する行事の一つと言えます。

本号では、このように定着して現在に至る学習院と馬との関係が、アジアの中の日本における馬と人の歴史を含めて、貴重な史料とともに紹介されております。凝縮された解説をゆっくりとお読みいただき、一層興味を深めていただきたいと思います。

展覧会の実施と本号の作成にご協力くださいました皆様に心から御礼申し上げます。

(館長 和光 純)

## 馬 —その歴史と学習院— 展

明治10年(1877)華族子弟の教育機関として開校した学習院では、同12年(1879)に馬場開き(馬術開業式)が行われ、「馬術」が正課とされました。学習院は日本で最初に学生馬術教育が行われた学校となります。

馬術は華族の子弟にふさわしい軍人を養成するための教科でしたが、第10代院長乃木希典をはじめ、教員たちは馬術を通じて、学生の精神面を鍛錬することも重視していました。

今回の展覧会は、学習院馬術部のOB会である「桜鞍会<sup>おうあん</sup>」から当館に寄贈された史資料を中心に、中・近世の史料もあわせて紹介いたします。さらに当館には乃木院長の愛馬であり、学習院の馬術教育にその一生を捧げた「乃木号」の骨格標本が収蔵されています。この標本の生物学的調査研究の発表もいたします。

明治41年(1908)に建築された「厩舎」は、現在も目白キャンパス内で使用されており、国登録有形文化財になっています。桜の花の舞い散る中、ぜひ学習院の馬術教育の面影を残す厩舎へもお運びください。

(学芸員 長佐古美奈子)

# I アジアを駆ける馬

馬の祖先は今から約 5500 万年前に北アメリカで誕生し、世界各地へと生息域を広げた。馬と人が出会ったのは約 300 万年前。紀元前 3000 年頃には馬の家畜化が行われていたと言われている。その後、馬は人の文化の発展に密接に関わるようになった。ここでは、アジアの中でも、日本在来馬のルーツである中国の馬の利用に関する史料を紹介する。

中国における馬の家畜化を示す最も古い例は、殷墟（河南省安陽市、紀元前 14～11 世紀）で出土した車に繋がれた馬骨と馬具である。その後馬の利用は黄河中流域へ、そして大陸中へと展開し、馬の飼養管理体制も確立していった。

## 唐三彩馬俑 中国・唐代（7～10c）旧制学習院歴史地理標本室収蔵資料



中国・唐代（7～10 世紀）に制作された馬俑。本品はアラブ (Arab) 種の馬の特徴を持つ。唐ではシルクロードを通じて西方から入ってきた商品とともに多くの馬が取り込まれていた。

(国際研究教育機構 PD 共同研究員 橋本佐保)

## 太宰春台評小戎図 江戸（18c）松室家史料

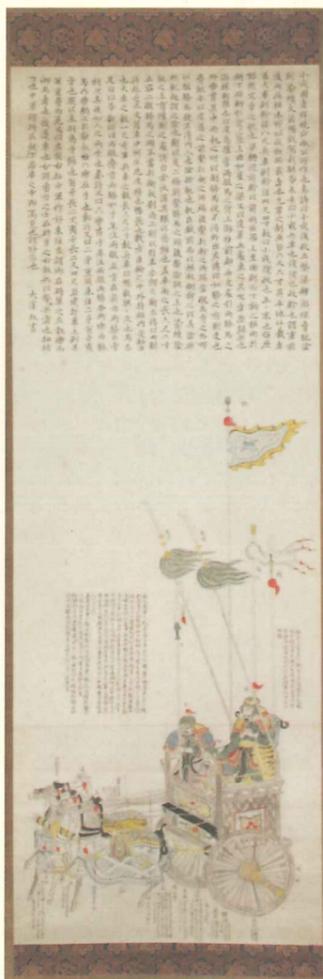
「小戎」とは、中国古代に用いられた馬立の戦車のこと。この「小戎」の語は、もと儒教の経書の一つである『詩経』に見える。本資料には、この「小戎」の絵図とそれに対する評語があり、前者は釈暁山（1706～1742、名は亮徹、本姓は高木）、後者はその師の太宰春台（1680～1747）によるものである。これらは古典（とりわけ儒教の経書）に見える動植物や器物が何であるかを研究する、いわゆる名物学の成果といえる。

なおここに見える太宰春台の評語は、おそらくその文集などには見えない佚文である。朱熹（朱子）の『詩経』注釈（『詩集伝』）をはじめ、中国古代の様々な文献を駆使して、逐一暁山の誤りを指摘している。またその中段に「皇疏」（中国南北朝時代、梁の学者皇侃の『論語義疏』）が引かれていることは、注目に値する。これは、中国本土では早くに失われ、日本にのみ残存していた『論語』の注釈書である。太宰春台と同じく荻生徂徠の門弟であった根本遜志が、足利学校に遺存していた写

本を整理の上、出版して世に広く知られることとなった。ここで『論語義疏』が引かれているのは、当時としては最新の研究成果を反映している。

最後に本資料の来歴であるが、これはもと学習院中等学科の図画教師であった松室重剛（1856～1929）の旧蔵である。松室自身が入手したものであるかは未詳であるが、松室家は、京都松尾大社に縁の深い月読神社の神職をつとめ、また朝廷の様々な御用をつとめる非蔵人の家柄であったことから、同家に伝来したものであった可能性もある。

(国際研究教育機構 PD 共同研究員 中嶋諒)



## 騎馬打毬の発祥と伝播

騎馬打毬はペルシアのダレイオス I 世（在位紀元前 522～486 年）が編成した騎兵隊の武術訓練の手段として騎馬擬戦を始めたことに端を発すると言われている。これがシルクロードを通じて世界中へ広まり、その土地に合わせた変化を遂げた。インド北東部で行われていた打毬は 19 世紀まで続き、その後はアメリカ、イギリスなどでポロとして発展した。

中国における騎馬打毬は王侯貴族が行うスポーツとして唐代に最も流行した。ちょうどこの頃、唐で鎧の使用・重装騎兵の廃止・馬政の充実がなされた。軽装で俊敏な良馬を自在に操れるようになったことが、流行の要因であると考えられる。

日本の打毬は 8 世紀に渤海国から伝来し、天皇家や公家の間で行われた。騎馬打毬を実施した明確な記録が残されているのは天曆 9 年（955）以降である。しかしこの騎馬打毬は地方豪族の勃興により僅か 30 年足らずで衰退してしまった。

長い間歴史の中に埋もれていた騎馬打毬を復興したのが、江戸幕府八代将軍徳川吉宗（1684～1751）である。彼は騎馬打毬を集団的実践的な武芸として各藩に奨励した。その後、騎馬打毬は幕末まで武家の中で盛んに行われるようになった。現在でも騎馬打毬が行われているのは宮内庁、山形県山形市豊烈神社、青森県八戸市長者山新羅神社である。両神社では神事として継承され、県の無形文化遺産となっている。

本展示では、霞会館のご協力により上記の打毬に関する映像資料の上映が実現した。あわせてご覧いただきたい。

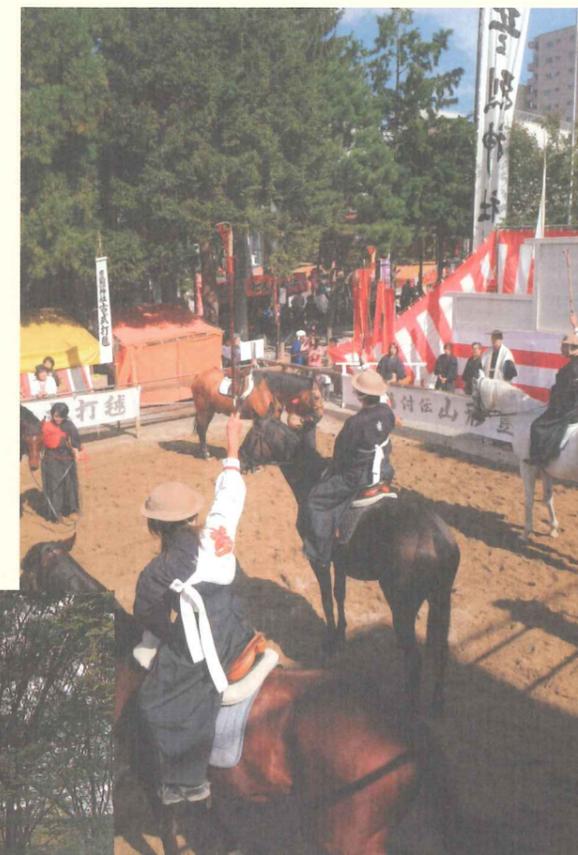
(国際研究教育機構 PD 共同研究員 橋本佐保)



八戸長者山新羅神社



宮内庁



山形豊烈神社

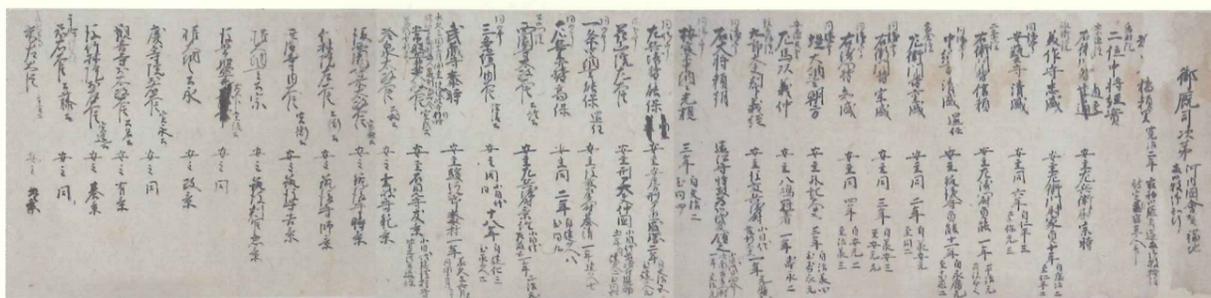
写真はいずれも霞会館編『騎馬打毬』より

# II 中・近世史料にみる馬

馬は、農耕・輸送・移動・戦場での乗物など、古くより人々にとってかかせない身近な存在であったことから、当館収蔵史料の中にも馬にかかわるものが多くみられる。ここでは、中世史料として公家の西園寺家文書と、近世史料として大名の阿部家文書のなかから馬に関係する史料を紹介する。

## みまやつかさしだい 御厩司次第 室町時代 (16世紀)

西園寺公友氏寄託



本書は、戦国時代に書かれたもので、平安時代後期(11世紀末)から室町時代後期(16世紀中頃)までのおよそ500年にわたる、院(=上皇。讓位後の天皇の呼称)の厩を管理統括した役所(御厩)の長官(御厩司)と実務担当者である案主(安主)歴代の名簿である。訂正や単純な誤りもあるため、清書したものではなく草稿だと思われる。

承久の乱(1221年)以前、つまり鎌倉幕府が安定するまでの時期については、上段に御厩司の名前と、その右肩に時の院の名前が、下段の案主の欄には、御厩司および案主の任期と就退任の年が記されている。

貴族の生活が潤っていたころには、院のもとには全国から多くの馬がもたらされ、その馬たちは京都周辺の放牧地(牧)で飼育されていた。それらを管理した院の御厩司には、院の信頼を受け、軍事的に奉仕する人物が任じられることが多く、平忠盛・清盛・重盛などの平氏一門や、源頼朝と弟の義経、御成敗式目を作ったことで有名な北条泰時など武士の名前が見えている。また、案主には御厩司の右腕と呼べるような人物が就任していることもわかる。

承久の乱を経て、鎌倉幕府の力が安定すると、貴族の中では幕府や天皇家とも緊密な関係を持った西園寺家が権勢を得て、御厩司にも公経・実氏・実兼以下の西園寺家歴代の当主が就任するようになった。しかし、室町時代に入ると、貴族の地位も財力もますます低下

し、荘園などの支配が維持できなくなっていった。西園寺家もまた例外ではなかったが、戦国時代に至るまで、少なくとも院御厩司に付属する所領であった河内国会賀・福地(大阪府藤井寺市ほか)の両牧からの収益を得ていたことは、この史料からうかがえる。

(客員研究員 徳仁親王・木村真美子)

### 西園寺家文書

西園寺家は、藤原氏北家閑院流の堂上家で、家格は摂関に次ぐ清華。平安後期の通季を始祖とし、鎌倉初期の公経の代に西園寺と号した。維新後は、華族制度のもとで侯爵、のち公爵にのぼった。同家に伝来した史料は、宮内庁書陵部・立命館大学など諸所に伝わるが、当館にも、平成8年(1996)に西園寺公友氏から寄託された600点余が収蔵されている。

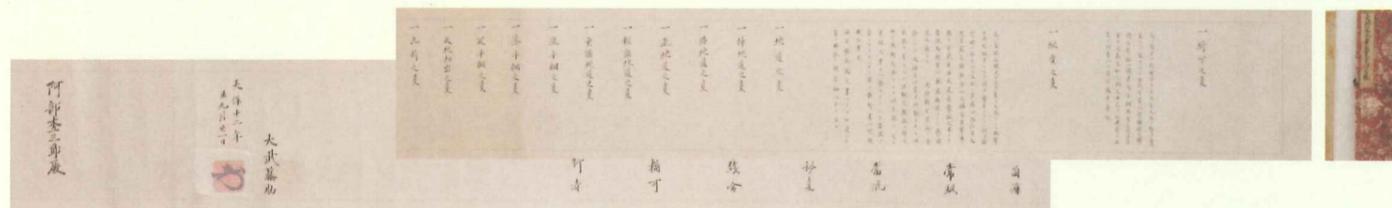


春日権現霊験記(模本)、前田氏実・永田幾麻  
Image: TNM Image Archives

## おおつぽほんりゅうじょうぎやぶち たづなもくろく 大坪本流常駈策手綱目録

阿部三郎(正定)宛 天保12年(1841)丑9月21日

阿部正靖氏寄託



大名家など武士の家には、馬術を含む剣術・弓術・槍術などの武術に関する秘伝書や免許状が残っていることが少なくない。それだけ武芸が重んじられたことのあるといえよう。平安時代後期以降、武士が台頭してからは、合戦で馬が重要な役割を果たすようになり、乗馬技術や良馬の飼育の向上が見られた。鎌倉・室町・戦国時代を経て、江戸という戦のない平和な時代を迎えても、武士のたしなみとして馬術が盛んに行われたことが、阿部家に伝来した馬術の免許状によっても窺える。

本史料は、陸奥国白河藩主14代当主阿部正定\*に授与された、馬術の流派の一つである大坪本流の免許状

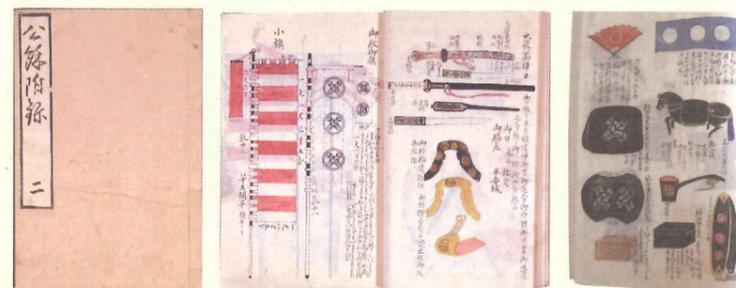
である。基本的な乗馬法・調教法63箇条と手綱・鞭の操作法が伝授されている。大坪本流は、一説に足利義満・義持に仕えたと言われる大坪慶秀によって創始された大坪流(小笠原流、八条流、内藤流共に古流)から別れた流派。大坪本流は、江戸時代中期に「五駈の法」を考案した福岡藩士斎藤定易(1695~1744)によって開かれた。「五駈の法」とは、①乗駈②相駈③礼駈④軍駈⑤医駈である。

\*正定は、阿部家の分家である旗本阿部正蔵の長男として生まれ、嘉永元年(1848)正備の養子として白河藩を継いだ。同年に25歳で死去した。この免許状は、藩主になる以前の17歳の時にもらっていたものである。

## こうよふろく 公餘附録

江戸~明治時代(19世紀)

阿部正靖氏寄託



「公餘附録」は、譜代大名阿部家の歴史について歴代当主ごとにまとめられた編年史である「公餘録」(全8巻)の附編で、12巻からなる。内容は、系図、絵図などさまざまな参考資料が載せられており、その中に馬に関する記述もみえる。家臣川澄次是によって慶応2年(1866)以降に編纂された。(学芸員 丸山美季)

### 阿部家と馬

阿部家に伝わる有名な逸話がある。大洪水が江戸を襲った時に、三代将軍家光が、隅田川の濁流を馬で渡って救う者はないかと家臣に命じたが、誰も申し出る者がいなかった。その中で、二代藩主阿部忠秋が一人進み出て、今にも氾濫しそうな隅田川に馬を乗り入れて対岸へ無事に渡りきり、家光により賞賛されたというエピソードである。馬との関係の深い家柄であったといえる。

### 阿部家文書

阿部家は、譜代大名で、老中など幕府の要職を務めた人物を輩出した家柄である。武蔵国忍(埼玉県行田市)、のち陸奥国白河(福島県白河市)、次いで同国棚倉(福島県東白川郡棚倉町)で10万石を領した。家格は雁間詰・城主。維新後は子爵となった。古文書のほかに近代華族史料、古写真や長持など、総点数4700点余からなる。

# Ⅲ 馬と学習院とのかかわり 1

## 学習院における馬術教育

明治12年(1879)10月18日、神田錦町にあった学習院では院内の馬場開き「馬術開業式」が行われた。学習院の馬術教育の幕開けである。学習院は開院当時、華族会館が経営する学校として、「華族ニ海陸軍士官タルヲ勸奨シ」という趣旨のもと、学科に軍事に関する内容が盛り込まれた。そのなかに馬術は含まれ、正規の授業、すなわち正課とされた。学生馬術教育は、学習院が日本で最初であった。

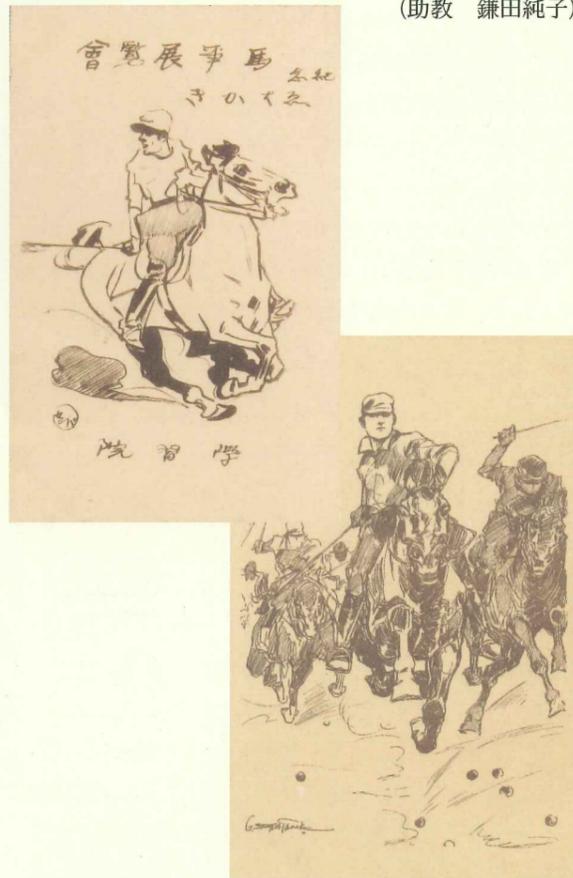
明治23年(1890)、三浦梧楼院長による教育改革で軍事教育が重視されると、中等学科・高等学科に「武課」が設けられ、ここに体操や乗馬、馬学が含まれた。その後、学生数に見合う馬数の不足などが理由で、馬術は正課から外された時期もあったが、常に馬術は盛んであった。院内馬術大会や打毬大会が恒例となり、御所で天覧試合が行われることもあった。明治40年に乃木希典が学習院長に就任すると、馬術はさらに振興、乃木院長自ら馬術の練習を巡視、遠乗にも参加した。乃木は馬の世話から指導し、馬術を通じて学生たちに精神面における成長を期待したのではないかと考えられる。

こうした学習院の馬術教育をささえたのが歴代の錚々たる馬術教官たちであった。明治期においては、騎兵大尉・花嶋半一郎、元主馬寮技手・白極兵治、大正期には海軍の父といわれた山本権兵衛の甥で、元陸軍騎兵大尉・山本盛重などである。また、学習院初等学科卒業生の中には昭和7年(1932)のロサンゼルス

オリンピックで優勝したバロン西こと西竹一や、馬の挿絵画家として名を馳せた谷洗馬がいた。

第二次世界大戦下において学習院の馬術教育は不遇の時代を迎え、厩舎について馬が一頭もいなくなった時期が昭和23年(1948)から5ヶ月間あった。しかし戦後、新制学習院において授業での馬術こそなくなったが、部活動として華々しく復興した。

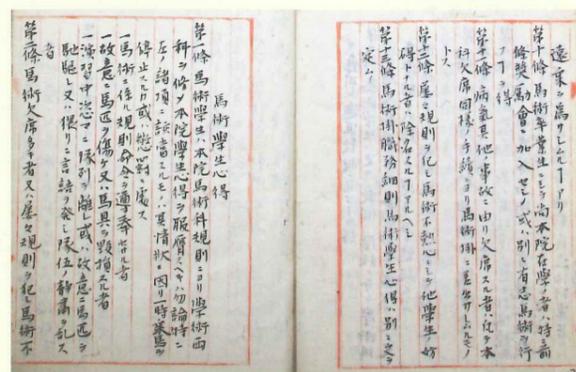
(助教 鎌田純子)



谷洗馬画絵葉書 大正15年



山本盛重絵葉書画「乗馬演習」明治38年



「例規録」明治35年(学習院アーカイブズ蔵)



寿写真(乃木希典から佐伯友文に贈る)明治39年(個人蔵)



乃木号写真(佐伯友文から乃木希典に贈る)明治45年(個人蔵)

## 乃木希典と愛馬「寿号」と、その仔「乃木号」

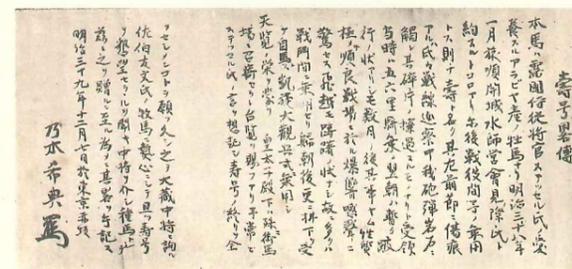
人と馬との歴史を考える上で感慨深い2枚の写真がある。左は、明治39年(1906)12月7日、乃木希典が愛馬寿号を鳥取県赤碕の牧場主・佐伯友文に贈る日の記念写真。右は、明治45年5月24日、寿号の仔である、乃木号を佐伯友文から乃木に贈った日の記念写真である。どちらも赤坂の乃木邸内で、馬の手綱を手にしている人物がそれぞれ、乃木と佐伯である。寿号は贈られる日、乃木家の家紋入り馬衣を付けていた。

寿号は、周知の通り乃木希典が第三軍司令官をつとめた日露戦争で旅順攻略後の「水師營の会見」の際、旅順要塞司令官ステッセルが乃木に贈った馬である。その名はステッセルの「ス」からとっている。青山練兵場で挙行された凱旋大観兵式の時に乃木が乗馬していたのは寿号であった。アラブ種の寿号は、体格が良い上に従順な性格の名馬で、乃木はこの血統を日本に広めるべく馬種改良に熱心であった佐伯に贈った。その後、寿号は佐伯牧場で約80頭に及ぶ仔馬を産出。その中から寿号によく似た1頭を、今度は佐伯が乃木に寄贈。これが乃木号である。本写真にみる若馬であった頃の乃木号の毛色は黒っぽく、馬籍簿からも確認できる通り、芦毛であった。芦毛は年を経て白い毛に変わる種類であるため、我々が他の写真に見る乃木号の姿はたいがい白馬である。

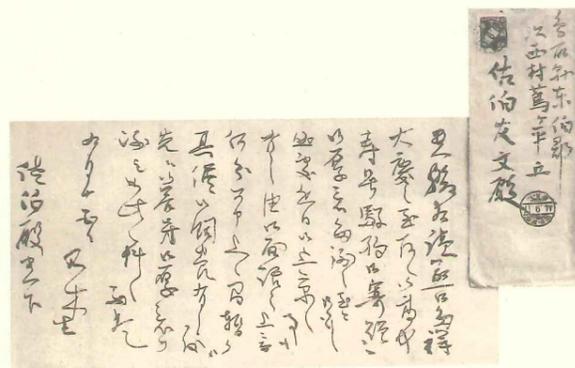
ところで、写真にうつる乃木の、乃木号をみる眼差しは実に優しげで、馬への深い愛情を感じさせる。だが、乃木と乃木号が共に過ごした時間は短く、この日から4ヶ月も経たない同年9月13日、乃木は明治天皇に殉死したのであった。乃木家の馬丁の語るところによれば、自刃する日の朝、乃木はカステラを手に一杯かかえて厩に立ち、愛馬たちと永遠の訣別をしたという。

乃木は明治40年1月から大正元年9月に自決するまで学習院長として、「高尚な人格」養成を理想とし、訓育を重視、その後の学習院の教育に多大なる影響を与えた。明治41年に校舎が目白に移転されると、全寮制とし、自らも質素な宿舎で学生と共に起居した。この頃の乃木の狂歌に「寄宿舎で楽しきことを数ふれば撃剣音読朝めしの味」というものがある。学生に対し、厳しくも慈愛あふれる教育者としての一面が偲ばれる。馬術を通しては、雨の日、雪の翌日は馬が滑るから乗馬は控えよ、遠乗のあとは自分の喉を潤すよりも先に馬に水を与える。当時の学生がみた、乃木が馬を大切に思う行動の逸話は枚挙に暇がない。馬事を通して乃木が学生たちに伝えようとしたことは、何であったのだろうか。乃木亡きあと、その愛馬乃木号は学習院の馬として昭和12年(1937)まで生き、学生たちに「乃木さん」と慕われて、学習院の馬術教育にその一生を捧げたのであった。

(助教 鎌田純子)



乃木希典の自筆による寿号略伝 明治39年12月7日付(個人蔵)



寿号の仔馬について乃木から佐伯に宛てた書簡 明治44年9月15日付(個人蔵)



# III 馬と学習院とのかかわり 2

## 学習院馬術を支えた教官

旧制学習院の馬術教育を支えた教官たちのうち4名を紹介する。

学習院では正課の授業とそれ以外の時間に課外活動として志願者に馬術を学ばせていた。後者がのちに馬術部となる。馬術教官は授業と課外活動の両方に携わっていた。



大正12年卒業記念写真。右端が白極教官。背景の建物は、当時の図書館（現・史料館）

明治22年(1889)から同27年まで奉職した花嶋半一郎(1863~1894)は、明治16年にフランスへ留学しソミュール騎兵学校で馬術を学んだ、馬術界の草分け的存在である。明治21年に帰国後学習院に着任、陸軍騎兵大尉でもあった花嶋の馬術の授業は帯刀して馬を操るなど実戦を目的としたもので、軍人養成という学習院の教育理念にながっていた。

明治37年に赴任した白極兵治(1878~1936)は宮内省主馬寮技手出身の教官である。白極は、打毬競技や撒紙競馬(野外に撒かれた紙を探しながら、正しい経路でゴールに至る時間を競う)を得意としていた。



大正15年、全国高等学校対抗競技会優勝旗を囲んで。前列右が白極教官、左が山本教官。後方に打毬の毬門が設置されている

37年間馬術教育に携わっており、馬の生態についても獣医以上の知識を持っていたと言われている。

白極と同時代に馬術を盛り立てたもう一人の教官が山本盛重(1882~1962)である。山本は海軍大臣などを務めた山本権兵衛の甥である。学習院初等学科を卒業し、陸軍幼年学校、同士官学校から騎兵連隊を経て、大正10年(1921)学習院馬術教官に着任した。学習院在職中の昭和7年(1932)、ロサンゼルスオリンピックに出場するなど馬術界に名を馳せた人物である。馬術教官としての山本は馬場や厩舎に黒板を持ち込み、乗馬人としての心構えや愛馬精神、馬術の基本動作などを図解入りで丁寧に教えるなど、学生にとって時間を忘れるほどの名講義であったという。騎乗の指導では、学生の名前は呼ばずに馬名で号令をかけ、馬も山本の号令にはとても従順だったという。「馬術は武道であり、馬が御せなければ人の上に立つ人間にはなれない」との持論を裏付けるエピソードである。



昭和17年、山本教官の授業風景



昭和14年、中等科4年生の馬場での練習風景

昭和11年(1936)に急逝した白極の後を継いだのが二村秀治(1892~1961)である。二村は騎兵学校を卒業後、宮内省主馬寮技手となり、「馬の殿下」の愛称をお持ちの三笠宮崇仁親王殿下の馬術稽古のお相手を務めている。第二次世界大戦中は厩舎を守り、飼葉の確保に奔走するなどの危機をのりこえ、学習院馬術の存続に力を尽くした功労者である。

## 第10回ロサンゼルスオリンピック (1932年7月30日~8月14日) と学習院



山本盛重旧蔵オリンピック記念アルバム

第10回ロサンゼルスオリンピック公式ポスター (秩父宮記念スポーツ博物館蔵)



山本盛重には終生大切にしていたアルバムがある。茶色の合皮製表紙には、周囲に金の雷文様がめぐらされ、中央には騎乗の人物が金で型押しされている。表紙の右下に「昭和七年八月米国ロサンゼルスにて行はれしオリムピック馬術競技に参加せし時の記念写真帖山本盛重」と書かれた付箋が貼ってある。昭和7年のロサンゼルスオリンピックに、馬術の代表選手として出場した際の思い出の写真を納めたアルバムである。表紙の左上には同オリンピックの公式ポスターのデザインのスタンプシールが貼られている。

ロサンゼルスオリンピックが開催された昭和7年は、世界恐慌のあおりを受け、経済状況は悪化、満州事変の勃発や東北飢饉のため、国内も不安定で厳しい状況であった。当時、馬術ができたのは貴族か軍人が大半で、オリンピック各国出場者の多くは軍人であった。日本からの参加も監督の遊佐幸平以下全員陸軍騎兵学校の将校で、そのうち男爵の爵位をもつ西竹一(1902~1945)と山本は学習院初等学科出身者であった。

馬術競技はオリンピック最終日に行われた種目であった。山本は最年長の50歳で総合馬術(3日間、同一人馬で馬場馬術、野外走行、障碍飛越を行う。軍馬競技:ミリタリーとも称す)に出場して第7位に入賞。西は、大障碍飛越(約1kmのコースに最高1.6m計19の障碍を設け、技とタイムを競う)で堂々金メダルを獲得した。西の競技の後、場内に「バロン(Baron=男爵)ニシ」の勝利を告げるアナウンスが流れると、8万の観衆は嵐のような拍手を送ったという。西は初等学科時代に院長であった乃木希典に心酔して軍人への道へ進んでおり、馬術にのめりこんだのも乃木の影響が大きかったと考えられる。昭和11年(1936)の



ロサンゼルス入りした選手団。右より西、ひとり置いて、奈良太郎、遊佐幸平、吉田重友、山本、今村安(城戸俊三の撮影か)

第11回ベルリンオリンピックにも出場するが、第二次世界大戦中に硫黄島で戦死した。

西や山本ら馬術選手のロサンゼルスオリンピックでの活躍は、日本国民に驚きと感動を与えた。帰国後9月8日に行われた凱旋パレードでは、西を先頭に東京駅頭から二重橋前まで騎乗パレードを行っている。その後も歓迎ムードが続き、学習院馬術の名声を広く定着させるきっかけにもなった。



バロン西と愛馬ウラヌス号

学習院出身のオリンピック選手がもう一人いる。戦後の復興の象徴である昭和39年の東京オリンピック(1964年10月10日~24日)に出場した岡部長衛(1923~2001)である。岡部は文部大臣を務めた岡部長景の長男として生まれ、学習院初等学科から東京高等学校に進み、昭和6年のインターハイでは2位に入賞している。51歳で出場したオリンピックでは、馬場馬術(常歩、速歩、駆歩)の3種の歩き方で停止、後退、旋回などの演技を競う)で個人19位、団体6位という成績をおさめた。長衛の息子長忠(昭和40年卒)は父の馬への情熱を継承して学習院大学馬術部に所属、その後馬術部監督にも就任した。学習院馬術のサポーターのひとりである。(学芸員 富田ゆり)



昭和7年9月7日、帰国直後の凱旋パレード(東京駅前)。日章旗を手に騎乗する西ら選手団一行

日本では、鎌倉時代以降、武士の時代が到来すると、戦で命運をともにする馬と人の距離はさらに近くなり、馬の活躍の場面は飛躍的に増加した。鞍や鐙などの馬具も、具足や刀などの武具同様に、時代が下るにつれ美術的な面でも趣向を凝らしたものが多く見られるようになる。鞍橋くらぼねとよばれる木の骨格に、革・鉄・螺鈿らでん・金貝・木彫・蒔絵などの材料や技法で装飾された鞍や、セットとなった鐙には、一種の総合芸術といえるものも散見される。

今回の展示で出品されている「左三ッ巴紋花鳥円文蒔絵鞍・鐙」は、江戸時代に制作された鞍と鐙である。全体に金粉を密に蒔き付けた上に、家紋や霊獣、花鳥獣などの文様が金銀高蒔絵と金切金きりかねで仕立てられている。こうした蒔絵や切金などの加飾部分は19世紀のものだが、鞍橋にはさらに古い寛永21年（1644）の銘がある。鞍の骨格を成す鞍橋は、表面の加飾が傷んだ際に仕立て直して使われる例も多く、銘と加飾の時代が異なるものもしばしば見受けられるが、展示の鞍と鐙もこうした例の一つであろう。

展示室では、日本の鞍や鐙の造形とともに、金銀高蒔絵で描きだされる多種多様な文様と、切金を多用したその精細な表現を、ぜひ間近で見たい。

（学芸員 吉廣さやか）



左三ッ巴紋花鳥円文蒔絵鞍・鐙

## 平成 26 年度学習院大学史料館特別展 「馬 — その歴史と学習院 —」展

- 【主催】 学習院大学史料館
- 【共催】 学習院大学国際研究教育機構
- 【協力】 馬の博物館・霞会館・桜鞍会・学習院馬術部・  
学習院大学図書館・学習院アーカイブズ
- 【会期・会場】
  - ・平成 26 年 4 月 5 日（土）～ 6 月 7 日（土）
  - 平日・土曜 10:00～17:00
  - 日曜・祝日、5 月 15 日（木）閉室、
  - \*4/13（日）「オール学習院の集い」特別開室
  - ・北 2 号館 1 階 学習院大学史料館展示室
  - ・入場無料
  - ・ギャラリートーク
    - ① 4 月 13 日（日）
    - ② 5 月 24 日（土）
  - 12:00～14:00～（各回 30 分）

\*この展覧会は、  
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代アジアへの眼差しと教育—学習院コレクションの総合的活用」、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジアの歴史都市と自然環境—先端科学が拓く『古都・長安学』」の関連事業です。

## 第 73 回学習院大学史料館講座

5 月 10 日（土）14:00～16:00（予定）

### 「馬の博物誌」

馬の博物館副館長 末崎真澄氏

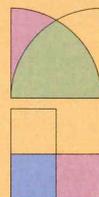
### 「学習院の馬術 135 年」

元学習院馬術部監督 岡部長忠氏

会場：学習院大学目白キャンパス西 5 号館 B1 教室

### ミュージアム・レター第 25 号

2014 年 4 月 5 日発行  
〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1  
電話 03(3986)0221  
内線 6569  
FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History  
学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください  
<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>